報　告

# コロナ禍における移民第一世代の文化・コミュニティ維持への課題と可能性 −オンラインロザリーの限界−

藤本陽子*1

キーワード：コロナ禍、移民第一世代、コミュニティ維持、オンラインロザリー

## 1　はじめに

2020年、世界的に新型コロナウイルスの感染が広まり、人々はそれまでの生活形態を変えざるを得なくなった。緊急事態宣言発令[註1]、また緊急事態宣言解除後も続いた東京都および近県の移動自粛要請[註2]により、県境を越えて各戸を訪問することはもとより、家を出ることが不可能となった。

しかしそれ以前に日本のカトリック教会全体は、教会での感染拡大を防ぐために多くの教区（16のうち12）での公開ミサ中止を決定している。[1] 公開ミサというのは、通常行われているミサのことで、信徒が教会に集まってきてミサに参加する形式のことである。つまり、公開ミサの中止というのは、聖堂内で司祭がミサを行う時に信徒はそれに参加できなくなったということである。

拙著「宗教の異なる移民先における家庭での宗教継承の可能性−フィリピン人、ブロックロザリー−」に、フィリピン人第一世代のブロックロザリーというマリア像が各戸を訪問するという活動について述べたが、公開ミサの中止を決定した教区の一つである東京教区（東京都および千葉県）は、このブロックロザリーのグループが所属する教会が所在するところである。推定400人ほどいるというフィリピン人を中心としたコミュニティの一活動として、このブロックロザリーがある。

東京教区は2月26日に、2月27日から3月14日までの公開ミサ中止を発表し、併せて小教区（各教会）でのグループでの集まりには規模により延期または中止することを推奨した。[2]

ちなみにこの2月26日という日は2020年の灰の水曜日と呼ばれる日で、クリスマスより重要な復活祭の前の四旬節（四旬は40日の意）の始まりの日であり[註3]、ロザリオのグループのメンバーのみならず、他の信徒にとってもこのグループでの活動の中止の推奨は重大な決定事項であった。その後公開ミサ中止期間の延長が重ねられ[3][4]、政府による緊急事態宣言の発令もあり4月12日の復活祭の公開ミサも行われず、さらに規模の如何を問わず、すべての活動（洗礼式、葬儀を含む）の中止あるいは延期の要請がされることになった。[5]

教会を中心に形成されていたフィリピン人第一世代のコミュニティは、2月27日から教会内ではもちろんのこと、教会外でも物理的に会い、活動をすることが不可能となり、当然のことながらブロックロザリーという活動も停止せざるをえなくなった。このような状況で、bonding（つながり）を重視する彼らが代替手段として取ったのが、このオンラインロザリーというものである。そもそもロザリオの祈り自体は集団でする必要はなく、個人でもできるものである。しかしそれを個人でせず、あえて集団で、ある時間にインターネットを利用してヴァーチャルでつながり、リアルタイムで行うのである。

おそらく、ビデオコールを通してのコミュニケーションは、コロナ以前から、移民である彼らのほうがよく利用しているのではなかったかと思われる。国境を越え海を越えた母国の家族や親戚との顔を見ながら連

*1　至誠館大学　ライフデザイン学部

絡を取る手段であり、今回コロナ禍で直接会うことができなくなった人たちが選ぶものとして、以前から存在していた方法で、当然の帰結であったと言えよう。

本稿では筆者が実際に参加し、また参加者に6月下旬から7月上旬に調査したことを基に、オンラインロザリーが始まった経緯と、未だに教会のグループとしての活動ができず、教会が公開ミサを中止している状況下、現在進行形で行っているこのオンラインロザリーの実情について記録するとともに、移民先での出生国の文化およびコミュニティの維持の課題について述べたい。

## 2　背景

新型コロナウイルス対策の早かった香港では1月27日にローマ・カトリックの香港教区が、換気をすること、ウィルスを除去するように建物内や使用したものすべてを掃除すること、マスクをすること等、現在日本で普及している予防策を香港の教会に通知（改訂版）[6]し、公開ミサでの新型コロナウイルス対策を早くから行っていた。しかし、感染拡大に伴う政府の対策強化に合わせ、2月13日に公開ミサの中止および2月26日の灰の水曜日の式の中止を発表することとなる。[7]そしてミサを対面で行う代わりに、インターネットでの配信が始まった。

シンガポールでは1月29日の礼拝でクラスターが発生し[8]、韓国でも同様に宗教施設で何度かクラスターが発生し、パーティーなどとともに宗教施設での集会が危険視されるようになった。

このような流れから、カトリック教会は香港以外の国々でも新型コロナウイルスの感染拡大に伴い公開ミサを中止し、インターネット、その他メディアを通してのミサの公開が始まった。教皇フランシスコは、3月7日に、今後サン・ピエトロ広場へ書斎の窓から姿を見せることをやめライブストリームに移行することをアナウンスし、ヨーロッパの教会がこれに続いて公開ミサを中止した。[9] 註3

前項で述べたように、日本でも近隣諸国の流れを受け、政府の緊急事態宣言以前に公開ミサを中止しインターネットでミサの配信を始めた。インターネットのミサ配信の詳細について本稿では割愛するが、インターネット配信には長所も短所もあるが、それまでは参加することのできなかった海外のミサを時間と場所に関わらず「視聴」（参加ではない）できるようになったことは画期的なことではある。

このように、新型コロナウイルスの感染拡大により、世界中の教会がリモートに移行した。

## 3　オンラインロザリー

オンラインロザリーは、所属する教会での活動停止と共に、ブロックロザリーの構成メンバーでもあるコミュニティの中心人物により始まった。その目的はロザリオの祈りそのものにもあったが、コミュニティ維持のためでもあったと言う。当初はオンラインロザリーという名前ではなく、Facebook 上のメッセンジャーグループにあったブロックロザリーがそのまま利用されていた。単にロザリオを祈るという名称だったようだが、後にオンラインロザリーという名称が定着する。SNS のグループ動画メッセンジャーでロザリオを祈ること自体は、フィリピン人女性3名が新型コロナウイルス感染拡大以前（1月）から行っていたようである。それが公開ミサの停止を受けて、教会のコミュニティの活動として拡大した。参加者は東京都および埼玉県在住の所属教会のフィリピン人女性と、フィリピン在住のフィリピン人男性である。その活動は教会コミュニティの Facebook のページに公開されることで周知され、新たな参加者が期待された。このように誰でも参加することができるようになったが、実際に参加しているのは元来教会でもコアとなり活動しているメンバーが中心となっている。この、コアとなり活動しているメンバーとは、コミュニティの中で次のようになっている。

コアとなり活動しているメンバーとは教会委員を含

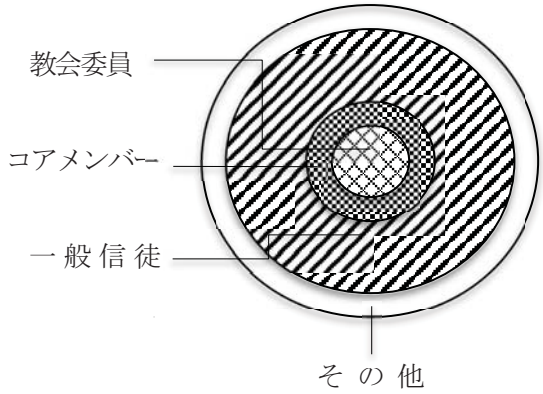


図 1 コミュニティメンバーの構成

むメンバーである。多くが子育てが終わった世代、あるいは孫のいる世代である。ちなみに上の図の「その他」はミサに参加せず聖堂に祈りに来るだけ、あるいは訪問者のような一時的に参加する人である。

さて参加者に参加のきっかけを聞くと、既存の Facebook のブロックロザリーグループメッセンジャーのメンバーであったという人もいるが、教会のコミュニティのメンバーとしてまた友人から誘われてという人が多い。つまり活動を知って自発的に単独で参加するというよりは人が人を呼ぶ形式で、まさに bonding を重視するフィリピン人らしい参加のしかたといえる。

実施方法であるが、当初は、ブロックロザリーの Facebook メッセンジャーアカウントのビデオコール機能を使って行っていた。しかし人数制限をオーバーする人数が集まりグループに入れない人が出たため、ZOOM に移行した。ZOOM は URL の公開で誰でも参加できるため、新たな参加者が期待されたが、その後、ZOOM より LINE のグループコールの方が使い勝手が良いことと参加者の背景や顔が加工できること、時間制限がなく無料であることから LINE に移行し、途中 Facebook のメッセンジャーのグループコールの人数制限の改善もあったが結局現在に至るまで LINE を利用している。現在のメンバーは Facebook の時から参加していた人が大半を占めるが、ZOOM になってから参加した人もいる。

図 2 オンラインロザリー1(2020 年 11 月筆者撮影)

図 2 は祈っている最中の写真。顔を出す人は少なく祭壇か背景画の表示、あるいはビデオをオフにする。この日の参加者は筆者を含め 12 人であった。

図 3 オンラインロザリー2(2020 年 11 月筆者撮影)

図 2 の写真の 1 人の画像を拡大したものである。祭壇には花を供え、ろうそくに火を灯す。マリア像が 2 つ見える。

オンラインロザリーを行っている頻度は聖週間（復活祭前の一週間）の毎晩を除き週 4 日であるが、曜日については紆余曲折を経て、現在日曜日、月曜日、木曜日、金曜日で落ち着いている。紆余曲折というのは、緊急事態宣言下でも仕事が休みにならない介護職、小売店業などに従事する人の出勤状況の影響、また緊急事態宣言解除後に生活の変化があったからである。この週 4 日というのは、ロザリオの祈りが曜日ごとで 4 種類[註5]あり、現在の 4 日はそれをすべて網羅するための曜日である。日曜日はミサの時間と同じ午後 2 時から、それ以外の曜日は午後 9 時から行っている。祈りは、曜日によるロザリオの祈りのほか、通常のロザリオの祈りでも祈る“Hail Holy Queen”、“Prayer After The Rosary”、“Memorare Prayer”、及びこのコロナ禍の特別な祈り“Angel of God”および“Prayer to Saint Michael the

Archangel”がある。但し、“Angel of God”は後に割愛され現在は祈られていない。その後First PrayerおよびSecond Prayerとコロナ禍の祈りが続く。40分ぐらいである。

この活動の延長としてヴァチカンから、3月25日ヴァチカン時間午後12時（日本時間午後8時）に世界各地で同時に「主の祈り」を唱えようという呼びかけがあり、グループはFacebook上で画像配信を共有して視聴、祈った。

そのほか5月は聖母月と言われ、その締めくくりとして5月30日ヴァチカン時間午後5時30分からやはりヴァチカンからのインターネット生中継でローマ教皇とロザリオを祈るというものもあり、日本時間では夜中の12時30分であるにも関わらず、メンバーたちはFacebookの動画共有機能を使って一緒に見ながら、新型コロナウイルスの終息を祈るということも行った。

このように、自粛期間中にコミュニティ内のみの活動のみならず世界につながり活動できたのは、インターネット—オンラインという選択肢が世界的にできたことに拠る。インターネットの恩恵について付け加えれば、彼らはフィリピンから配信されるタガログのミサも一緒に視聴している。

オンラインロザリーの祈りは、単に集まって祈るだけでなく、メンバーのなかには家族に医療従事者がいる人、またこの期間故郷の家族を亡くした人、日本の知人友人を亡くした人、知人友人が病気の人がおり、個人で悲しみや心配を抱えるのではなく、その悲しみや心配をオンラインロザリー参加者に共有し祈る機会も提供している。このような特別な事情以外で、オンラインロザリーでは誰のために祈るのかをメンバーに聞くと、「みんなのため」、「パンデミックから救われるように、医療従事者など前線で働いている人たちのため、亡くなった人のため」、「世界が元に戻るように、自分の家族のために」、「自分たちのために、世界じゅうで生きる人のために」、「自分、家族、世界じゅうの人たちがコロナを生き残るために」、「早くパンデミックが終息し、元の生活に戻るように」と言い、コロナ禍だからこその祈りが目的となっていることが分かる。

この活動は宗教的な集まりである一方で、コミュニティのつながりを維持するためのものでもあると主催者は言う。そのため、祈りが終わるとすぐにオフラインになることは少なく、いわゆるおしゃべりタイムが始まり、悩み相談、手続きで困っていること、冗談、噂話、近況報告、情報交換、オンライン飲み会、などが誰かが終わろうと言うまで続く。時には深夜を過ぎることもある。実際、参加者にコロナ禍でのオンラインロザリーがどのように役立っているのかを問うと、「不安やホームシックが和らぐ」、「友人にオンラインで会え、その後に楽しくなんでもおしゃべりができる」、「孤独感が収まる」、「心が落ち着く」、「コロナ禍でどのように生きるかで役に立つ」と言う。教会に集まることができた時にはミサのあとに雑談をするために残っていた人たちが、オンラインロザリーの後の時間を同じように過ごしている。質問した時期は活動開始から4ヶ月が経っていたが、東京は都知事選の前で東京アラートが発動、解除、その後の感染者数増加などがあり、参加者は先の見えないことによる精神的不安定を抱えており、オンラインロザリーは彼らにとってそれを軽減させるものであることが分かる。

そのほか、最近は行っていないが、当初通常の日曜日のミサの後の活動を維持したいという気持ちがあり、教会でミサの後ホールで行っていたZUMBAを、オンラインロザリーの後に引き続き行っていたこともあった。外出自粛からくる運動不足解消というのもモチベーションの一因になっていたと考えられる。しかしこの活動は、インターネット上で起こるタイムラグと、参加者の減少で消滅した。

オンラインロザリーの参加者数であるが、当初は20人を超えた。その後緊急事態宣言が解除され仕事が再開した人、家族が増えた人など、日常生活が忙しくなり現在は平日の夜は9人〜11人前後で推移している。日曜日は本来ミサがあった日であり、時間も同じ時間を設定しているので、比較的参加者は多い。

このように感染者数が減らないまま「新しい日常」が始まり、しかし所属教会は公開ミサをしていないという状況で、現在は参加者が減少し固定化してきてはいるが、6 月末にこのオンラインロザリーをいつまで続けるかと尋ねた際、参加者からの回答は「オンラインロザリーが続く限り」がほとんどで、「日常生活が戻るまで」、「毎週日曜日のミサに参加できるようになるまで」、「できる限り」というのはわずかだった。主催者あるいは参加者がいつこの活動を止めることを決定するのか現在のところ不明である。

## 4　ブロックロザリーとの相違点

ブロックロザリーは、前述のようにマリア像を持ったグループが各戸を訪問する活動である。マリア像を運ぶメンバーは訪問した先で共に祈り、時に食事が振る舞われ、マリア像を預け、預けられた人は次の家にマリア像が移動する日まで（およそ 7 日から 10 日）、そのマリア像に向かってロザリオを祈る。マリア像を持ったメンバーが家を訪れる際は、受け入れの準備と食事の準備をする。訪れる先は教会に通っていない既知ではない家庭であることもある。そのため、ブロックロザリーはリアルであり教会に普段通わない人たちとのつながりを作る外向きの活動となる。ただし、家の中まで入り込むため、信者ではない家族は別室におり参加することは全く無いことがほとんであった。

一方オンラインロザリーはインターネット上で行われており、現在は LINE のグループに登録した既知の参加者であり内向きの活動である。参加者は家の中の自分の場所（主にマリア像を安置している場所）で、スマートフォン、タブレット、あるいはパソコンを使用し、場合によってはイヤホンをつけることで自分の空間を作って参加する。祈りを行う時間ではあるが、家族がいる部屋での電話、あるいはビデオコールをしているのと同様で家族の生活にほとんど影響はない。その場に居合わせた子どもに聞くと「お母さんの楽しみの時間」、「もう慣れた」と言い、容認している様子が窺える。実際に人が訪ねて来るわけではないので事前の掃除や食事の用意も不要で、途中でなにかあればビデオやマイクをオフにして対応でき、また祈りが終わればおしゃべりをすることなくすぐにオフにすることもでき、時間も遅いので寝間着での参加もあり得る。非常にカジュアルな場である。また週に 4 回と頻度も多い。

この違いにより、オンラインロザリーでは同室の家族、子どもや孫が登場あるいは参加しやすく、また回数が増えることで既知の仲になりやすくなっている。祈りがすべて英語であるため実際に祈りに参加する例はまだ少ないが、ロザリオの祈り前後に顔を出すことがあり、グループに入りやすくなっているようである。

## 5　オンラインロザリーの課題と可能性

以上のように、ブロックロザリーと異なり既知のメンバーが密に行っているオンラインロザリーではあるが、果たして本来の「コミュニティ維持」という役割は十分果たせているのだろうか。

先に述べたように、参加者は教会でコアとなって活動するメンバーが中心となっている。教会コミュニティ維持のためとは言うものの、推定 400 人ほどいると言われている主にフィリピン人が構成する英語ミサのコミュニティの規模から考えると、その40分の1が集まるこの活動が、果たしてコミュニティ維持になっているのかということである。

まず、環境である。現在の環境はグループコールというクローズドな環境なので、グループに登録する必要があり、入ることが自由ではないのである。つまり万一コミュニティの他のメンバーが、この活動をいつやっているかを知っても、飛び入り参加のようなことはできないということである。そのため参加者は固定化され、減ることはあっても増えることがない。

次に周知である。同じ場所にいる不特定多数に呼びかけることのできたリアルな環境と異なり、インターネット上では不特定多数に呼びかけることは難しい。

このコミュニティはFacebookのページを持っており教会の内外の400人弱が登録している。当初はこのページに活動を投稿していたが現在はしていない。10月からメンバーが重複するがメンバー数が大きい別のグループのメッセンジャーへのこの活動の投稿が始まっている。しかし現在のところ、そのグループからの参加者が増える様子はない。

また前述の通り以前から教会でコアとなって活動しているメンバーが中心となって行っている活動である。言い換えれば、もともと教会内で親しいメンバーがオンラインで活動しているというのが現状であり、いわゆるコアメンバーと特に親しくないつながりの薄いコミュニティメンバーは参加していない。

ここで問題になるのは、彼らのいう「コミュニティ」が本当に「コミュニティ」なのかということである。たしかに彼らの存在がなければコミュニティの運営は難しく、彼らのグループが崩壊すればコミュニティも崩壊することから、最終的にコミュニティに敷衍するコアなメンバーの活動をコミュニティ活動の一部と考えられるかもしれないが、しかしこの活動を行っているのはやはりコミュニティ全体ではない。LINE上のグループ名に教会名を冠しCommunity Online Rosaryとしているが、その実コミュニティの一部の人々の活動となっているからである。

それは、コアメンバーとなっている彼らの活動を拡大する方法、周知する方法の多くが個人的な関係で関係性を広げていく方法で、あくまで個人的な人間関係に依っていることによる。前述のとおり、この活動のはじまりは個人的な活動をその周囲の人間に拡大させていったものであったことにも現れている。このことは一方でそれは、その個人的な人間関係に綻びができると、そこでの関係が途切れる危険性もはらんでいる。

では、この活動をコミュニティの活動として拡大できるのかというと、筆者は難しいと考える。それは、先に述べたようにコミュニティメンバーへの周知や自由参加が難しい現状もあるが、ロザリオの祈り自体にも限界があるからである。というのは、フィリピン本国でも「最近自分の出身地でブロックロザリーを行っているのは年長者や仕事のない主婦のみで、若い人がやっていない」[12]ことから、ロザリオの祈りに参加したいという人が、若い世代や仕事をしている人の多い一般信徒の層から現れることは期待できず、ロザリオの祈りがコミュニティ維持の求心力とはなり得ないと考えられるからである。

そのような意味で、コロナ禍でのコミュニティ維持のための活動としては、一般信徒の層を取り込むことができる別のオンラインの活動が理想的なのではないだろうか。それが何かは、コミュニティを構成する人員がどういう人々なのか、どういうことをコミュニティに求めているかを見極める必要があるが、少なくとも仲のいい仲間の集合体内だけで済ませてしまっていては現状を超えることはできないであろう。

このようにコミュニティの維持としては効果が期待できないこのオンラインロザリーだが、一方で先述のようにそのカジュアルさから、通常教会に来ることのない第二世代以下にもグループへの招きとしては一定の効果があることが分かる。このオンラインロザリーという機会を利用し、フィリピン人女性だけでなく女性の家族単位でのコミュニティへの参加につながることを期待したい。

## 6　さいごに

5月末に緊急事態宣言が解除され、6月下旬東京教区内の教会も公開ミサを限定的に再開し始めた。[9]ただし高齢者やコロナウイルスに感染すると重篤化しやすいと考えられる人々は教会に来ないように勧奨し、聖堂のなかの座席も間隔を空けて座るようになり、歌は歌わないなど依然として制約がある。活動については限定的に可能とされた。このコミュニティのある教会も2、3回参加人数を絞ったうえでのミサがあったが、その後再び東京都内の感染者数が増えて中止するなど、参加者にオンラインロザリーについて尋ねた6

月末から7月にかけた時期は、先行きの見えない不安定な時期であった。その後、9月に入り東京教区は活動の制限緩和を発表している。[13]それにより、室内定員の半分程度であれば活動をすることが認められるようになり現在に至っている。

一方社会は Go to キャンペーンが始まり、人々の移動が推奨され、活発化している。オンラインロザリー参加者に尋ねた時と 11 月現在とではすでに世の中の状況が変わってきている。しかしコロナウイルスの感染状況は改善せず、教会内外の状況は依然としてコロナ前には戻らず、第二波第三波が来ることも懸念されている。

このグループが所属する教会は 11 月 8 日より日本語のミサを人数制限しながら再開することを決めたが、英語ミサは未だ再開の見通しが立っていない。

おそらくこの教会の休止期間中に、一般信徒とその他の層は他の教会に通うようになっているなど変化が起きているだろう。あるいは、日曜日にミサに行かない状況が日常になり、ミサが再開されても参加しないかもしれない。ミサが再開するまで、このオンラインロザリーで彼らの言うコミュニティがどのような形でどの程度維持できるのか、引き続き見ていきたい。そしてオンラインロザリーがどのタイミングで、何が原因で解散するのか今後も注視していきたい。

［註］

註 1　埼玉、千葉、東京、神奈川、大阪、兵庫、福岡の7都道府県に2020年4月7日に発令。4月16日対象地域を全国に拡大。5月14日39県解除。5月21日3府県解除。5月25日緊急事態解除宣言。

註 2　政府による移動自粛要請は6月19日に解除。しかし都は感染者増加で7月4日に移動自粛要請。

註 3　復活祭の前の6日間を聖週間とし、その前の40日を四旬節と言う。その始まりの日が水曜日であり、灰の水曜日と言う。

註 4　その後9月2日に公開ミサを再開したが、コロナ感染者の増加に伴い再び11月4日からインターネット配信を始めることが10月30日発表された。[13]

註 5　呼称はいくつかあるが、月曜日と土曜日は The mysteries of joy、火曜日と金曜日は The mysteries of Sorrow、水曜日と日曜日は The mysteries of glory、木曜日は The mysteries of light と言う。

［引用文献］

1）カトリック中央協議会「新型コロナウイルス感染症に伴う教区の対応　3月18日現在」
https://www.cbcj.catholic.jp/2020/03/18/20399/　（アクセス日 2020.10.14）

2)　カトリック東京大司教区「新型コロナウイルス感染症に伴う、公開のミサ中止について」
https://tokyo.catholic.jp/info/diocese/36971/　（アクセス日 2020.10.14）

3)　カトリック東京大司教区「新型コロナウイルス感染症に伴う3月15日以降の対応」
https://tokyo.catholic.jp/info/diocese/37205/　（アクセス日 2020.11.10）

4)　カトリック東京大司教区「新型コロナウイルス感染症に伴う3月30日以降の対応」
https://tokyo.catholic.jp/info/diocese/37811/　（アクセス日 2020.11.10）

5)　カトリック東京大司教区「日本政府による緊急事態宣言を受けて」
https://tokyo.catholic.jp/archbishop/message/38161/　（アクセス日 2020.11.10）

6)　Catholic Diocese of Hong Kong Chancery Office (2020) "Revised Pastoral Guidelines in connection with the Spread of Novel Coronavirus Infection (Wuhan Coronavirus Infection" (アクセス日 2020.1.27), 1-4

7)　天主教香港教區　"Temporary Suspension of Public Masses on Sundays and Weekends and Cancellation of the Liturgy of Ash Wednesday"
https://catholic.org.hk/en/%e6%96%b0%e8%81%9e%e5%85%ac

%e5%91%8a-2/　（アクセス日 2020.10.14）

8）CAN “Chinese New Year gathering identified as missing link between COVID-19 church clusters” https://www.channelnewsasia.com/news/singapore/covid19-coronavirus-missing-link-found-church-clusters-12469236　（アクセス日 2020.2.28）

9）Vatican News　“Covid19:Churches around the world fight to prevent the spread of the coronavirus” https://www.vaticannews.va/en/church/news/2020-03/covid-19-coronavirus-churches-around-the-world-take-measures.html (アクセス日 2020.10.22)

10)　藤本陽子（2018）「宗教の異なる移民先における家庭での宗教継承の可能性—フィリピン人、ブロックロザリー—」『至誠館大学研究紀要』5,60

11)　カトリック東京大司教区「教会活動の再開に向けて」https://tokyo.catholic.jp/archbishop/message/39027/(アクセス日 2020.11.3)

12)　カトリック東京大司教区「教会活動の制限緩和について」https://tokyo.catholic.jp/info/diocese/40029/　（アクセス日 2020.11.3）

13) Vatican News “Pope Francis to resume live broadcast of General Audience」https://www.vaticannews.va/en/vatican-city/news/2020-10/pope-francis-general-audience-library-apostolic-palace.html（アクセス日 2020.10.30）

［参考文献］

1）藤本陽子（2018）「宗教の異なる移民先における家庭での宗教継承の可能性—フィリピン人、ブロックロザリー—」『至誠館大学研究紀要』5,51-63

2）藤本陽子、Alec R. Lemay (2014) “Filipino Investment, Multicultural Return: Considering Cultural Group Dynamics within Umeda Church, Tokyo” 『山口福祉文化大学研究紀要』8,41-59

3)　Le May, Alec R. (2020) “‘Blocking’ the Rosary? Filipinas, Mama Mary and Block Rosary Controversy”　『文学部紀要』33(2),1-28

4)　小ヶ谷千穂(2002)「ジェンダー化された海外出稼ぎと『矛盾した移動』経験」『年報社会学論集』15, 189-200

5)　金侖貞(2012)「フィリピン人女性の主体性確立とコミュニティ形成：地域教育活動を事例に」『人文学報』456,1-20